

オリンピックの所々に感じられる“英国らしさ”

ロンドン事務所

1. ロンドンオリンピックが明日に迫りました！

イギリスでは、オリンピックを前に大イベントが目白押しです。今年はエリザベス女王即位60周年記念事業のダイヤモンド・ジュビリーに続き、ユーロ2012やウィンブルドン(スコットランド出身のアンディ・マレーが英国人では74年ぶりの決勝進出。惜しくも敗れましたが、国を挙げてのかつてない大盛り上がりでした。)、加えて世界最大級の音楽の祭典プロムスも始まり、大イベント続きで、お祭り騒ぎに慣れてしまい、いささかオリンピックへの盛り上がりに欠けているよう感じられたのですが、いよいよ明日に迫りました。聖火リレーも7月21日にロンドン入りし、なかなか火のつかなかった英国人にもやっと「オリンピックが迫ってきたね。」と、日々の会話にのぼるようになりました。



オリンピックを目前にし、リージェント・ストリート等主要大通りには色鮮やかな各国の国旗が掲げられています。

聖火リレーも7月21日にロンドン入りし、なかなか火のつかなかった英国人にもやっと「オリンピックが迫ってきたね。」と、日々の会話にのぼるようになりました。

2. ウェストミンスター区もオリンピック開催に貢献

例えば、ロンドン市内のウェストミンスター区ですが、区内には広大な公園や広場が多数ある一方、バッキンガム宮殿、ウェストミンスター寺院等の歴史的な所に加え、英国国会議事堂、王立裁判所、ホワイトホール帯など政府の中枢が集中した地域となっています。



オリンピック広告と共に、ウェストミンスター区のバナーが掲揚。色鮮やかなオリンピック分とは異なり、黒を使用しており、逆に目立っています。

オリンピック開催に当たっては、聖火リレーはもちろんのこと、アーチェリー、ビーチバレー(なんと、近衛騎兵隊司令部のホース・ガーズで開催)、サイクリング、トライアスロン(これも、公園の水鳥と一緒にハイド・パークにて)、マラソン等多種の種目がこの区内において開催されます。区は、場所の提供やホームページを使用してのオリンピック情報提供など、様々なサポートを行っていますが、合わせて、地域の数人やコミュニティ全員に声かけしてローカル・リーダーになろうと呼びかけを行い、オリンピック開催を機に地域の連携を促す等、色々なプランを打ち出しています。これは、ダイヤモンド・ジュビリーの際、地域のコミュニケーションの円滑化を目的として路上等で近隣住民や友人達とホ

ーム・パーティーを行うことを呼び掛けるプロジェクト「ビック・ジュビリー・ランチ」が英国各地で開催され、これまで交流の乏しかった近隣住民の交流に大きな効果があったと言われていることから、今回もイベントを活用した地域住民への声かけが重要視されているのではないかと思います。また、区内ではオリンピック広告の旗と共にウエストミンスター区の旗が掲げられていますが、気のせいかもしれませんが、オリンピックの旗よりも目立っています。

3. 英国らしさを感じるオリンピック象徴モニュメント

オリンピックの主な開催舞台となるロンドン東部ストラトフォードに、赤いパイプが入り組んだ印象的デザインのアーセラーミッタル・オービット・タワーがロンドンオリンピックの象徴モニュメントとして建設されました。費用総額 1,900 万ポンドのうち、1,600 万ポンド（約 20 億円）をインド系鉄鋼企業のアーセラーミッタル・スチールが出資しています。また、デザインはインド出身ロンドン在住の著名現代美術家、アニッシュ・カプーアによるもので、下水システム用のパイプをタワーに組み込んでいます。世界へ発信する



約 115 メートルのオリンピック象徴モニュメント、オービット・タワー。開催後は地域のシンボルとして残すとのこと。夜の点灯時は非常にキレイです。

る国を挙げての一大イベントのモニュメントデザインや出資を、自国の企業や人材を登用してアピールするのではないところに、英国のビジネス姿勢を垣間見た気がします。

(栗田元所長補佐 徳島県派遣)

CLAIR